

## 第2回公開研究会 災害弱者への支援を考える

### 公開研究会について

本公開研究会は、2013年度の本学発達科学研究所が行った「災害弱者・援助者への支援に関する研究」事業の一環として開催したものである。東日本大震災を2年経過し、その支援は量的支援だけではなく質的支援も、マクロな視点からミクロな視点も含めた支援が必要になってきている。この報告は、災害弱者(子どもや高齢者や障害者)に焦点を当てると共に、その支援にあたってきた援助者(保育士、幼稚園教諭、支援ワーカー等)を一体的な関係にあると捉え、災害弱者とその援助にあたってきた専門職の実態を把握するための公開研究会の報告である。

(本研究事業代表者：熊坂 聡)

### 1. 研究会概要

(1)日時 2013年12月14日(土) 13:00~17:00

(2)会場 宮城学院女子大学C 306教室

(3)内容

#### ①基調講演

森正義(宮城県身体障害者福祉協会会長、特別養護老人ホームキングスタウン施設長)

#### ②シンポジスト

- ・佐竹悦子(美田園わかば幼稚園園長)
- ・鈴木健太(雄勝地域包括支援センター社会福祉士)
- ・村上 仁(仙台障害者相談支援従事者協会スタッフ、石巻・女川 障がい者総合サポートセンター所長補佐)

\*コメンテーター市川一宏(日本キリスト教社会福祉学会会長、ルーテル学院大学学長)

(4)主催 宮城学院女子大学発達科学研究所

### 2. 基調講演「災害と障害者」

森 正義

障害者フォーラムで作成した映画を見ていただく予定でしたが、機材の不一致でお見せすることができませんので、YouTubeで予告編だけお見せします。

さて、話を始めます。ここに3人の方がいると想像してください。一人は子ども、一人は高齢者、一人は障害者です。高齢者は、老人福祉法第2条に、社会に貢献をしてきたので敬愛の対象だと記されています。子どもたちは、児童福祉法に愛護の対象と記されています。だから震災に遭遇すれば保護の対象となります。障害者は、法律上は愛する対象とは書かれていません。震災に際して、障害者は犠牲になってもいいということなのでしょうか。障害者は、逃げようにも逃げられない、目が見えない、聞こえない、動けない、当然走れない。だから避難が難しいのです。気仙沼では2万人くらいが避難民になりました。私も体育館の避難所に行きましたけど、歩くのもやっとというような避難所ばかりでした。そこに車椅子の方、無理ですよ。そして車椅子の方はトイレの近くにいた方がよいということで寒い入口のところにいます。トイレだって、学校のトイレはバリアフリーじゃありませんので、寒くてとても不便でした。最初に申し上げたように、このような状況になってみると、この世の中に障害者は邪魔者なんですか？いらないんですか？と言いたくなります。

子どもは未来があるから、老人は社会に貢献してくれたから、それなりに助けても価値があるかもしれません。障害者は不要なのでしょうか？私はそのことを皆さんに考えていただきたくて今日この場に立っている者です。

障害の中には、例えば近いものと遠いものが区

別できない人もいます。だからすごい恐怖です。光に敏感で、音にも敏感な発達障害の方は、地震があってもなかなか理解できません。映画の中でも私が話をしましたが、やはり普段の生活の中で様々な面で地域住民との関わりを持っていないと言っています。いざという時に自分を助けてくれない、知らせてくれない、避難支援がこないということになるからです。メールにもすぐに応答しなさいと言っています。応答しなかったら「何かあったの？」って言って来てくれる関係を結びましょうと言っています。無論大災害が起きると、ひとり一人は自分のことで手一杯だと思います。もうそんな余裕はないと思いますが、でも一段落した時にあの人はどうなったの？と気にかけてくれます。障害者にとっては外とつながることも難しいのです。私は避難するならば是非大きな避難所に避難してくださいとアドバイスしています。大きな所に避難するということは、ものすごくストレスがかかります。発達障害の子ども達なんか本当に大変です。しかし、あえてそうすることによって見えてくるものがあり、助けがくるのです。落ち着くと福祉避難所も出来てきます。しかし、避難所にも仮設にも意外に障害者は見当たりませんでした。みんな自分の家や親戚の家などに行っていました。そうすると、障害者の避難の大変さが見えないのです。支援しようにも支援ができないこととなります。ですから助かる備え、助けていただく為の心の準備も必要ですよと話しています。特に障害者はそうです。見えない・聞こえない・歩けない・トイレにも行けないのですから、誰かの手助けをいつも必要とします。家族だけに頼らないで、親戚だけに頼らないで、ぜひみんなからの支えを受け取るようなそういう心がけでしましよと皆さんには話しています。ところが、これが実は簡単ではありません。現在もLDF（日本障害者フォーラム）は全国で岩手と宮城と福島でセンターを置いて活動しています。今も宮城県の障害者団体が協力してその被災した障害者の生活再建のために努力しています。また、多くの障害者は様々な施設や団体に所属しており

ますので、その団体や施設も再建のために支援を続けています。当然、行政も支援を続けています。阪神でできなかったことが今回の東日本でできるようになったことがたくさんあります。今回、国はサポートセンターというのを被災地に作りました。福祉避難所も多く設置しました。国も障害者支援の必要性に気づいてきているのです。

障害者を見捨てないで、忘れないで、皆さんの身近なところにおりましたらぜひ声を掛けて、何かの時には手伝って支援していただきたいと思えます。敬愛の対象とも、愛護の対象とも規定されていませんが、ぜひ障害者のために皆さんの心を、配慮を、支援を、お願いしたいと思います。将来そういう分野で働かれる方もいらっしやると思えますので、よろしくお願ひしたいと思えます。どうもありがとうございました。

### 3. シンポジウム

#### (1) 子どもの状況

佐竹悦子

皆様こんにちは。現在は、美田園わかば幼稚園に勤務しております。震災当時は名取市の保育所に勤務していました。震災当日は、名取市の閑上保育所所長でした。

およそ七千世帯が被災し、900名の死亡者を出す大きな災害となりました。津波は来ないと思われていた名取市でした。

閑上保育所は、昭和31年に開所し、昭和47年に今回流された地域に移転しました。閑上は、海拔0メートルがおよそ7キロ内陸に続くところにあります。保育所自体は漁港から260メートル、海南から800メートルのところにあります。その当日、津波は時速150キロ、高さ10メートルでやってきました。そのとき、私は保育所におりました。退所式のご案内をもって閑上公民館に行っておりました。急いで海岸線沿いにあります保育所に戻りました。子ども達はまだお昼寝の時間帯で、目覚めたばかり、パジャマ姿のまま怯えていたそうです。職員が布団を被らせて、様子を見ていて、大体4分後に大きい揺れが収まっ

て余震が続いている中で、段ボールを敷いて廊下を危険のないように渡らせて、園庭の中央に子ども達を集めて座らせていました。そこに、私は戻るのですけれども、もう既に園舎は地盤陥没で傾いて、廊下は凸凹、そして、開いた扉は閉まらないという状況でした。中央に集まっている子ども達を確認した後、職員から「全員おります」との報告を受けたので、即座に、三つの指示だけ与えました。「車を持ってきてください。逃げます。小学校で会いましょう。」 関上小学校の東昇降口に集合したのが15:20分、14:46分の地震発生からおよそ40分ですけれども、津波はまだ来ていませんでした。小学校まで逃げた後、小学校に津波が来たのが15:46分。本当に真っ黒い瓦礫で、水というのではなくて、大陸が押し寄せてくるような感覚を持ちました。もう駄目だと思った瞬間でした。次に今度は3月11日なのに雪が降ってきました。パジャマ姿一枚の子ども達では、とても寒さに耐えられないと思い、三階に避難しました。そして、津波が二階の校舎までやってきましたが、三階まではきませんでした。何とか免れたと思っていたら、今度は火災です。4度目の死を覚悟した瞬間でした。

そんな中で、小学校の何もない視聴覚室を選び、円陣になって座っていました。そして、職員にその時話したのが「平常保育を心がけてください」ということでした。もしもこの災害を乗り越えて子どもが助かった時にトラウマになって欲しくない、生涯、あの怖い震災を心に留めて欲しくないと思ったからです。そして、この後また大きな津波がやってきたとして、飲み込まれたとしても、子どもの心には楽しかった思い出がいっぱいあったら良いと願ったからです。保育士たちは、平常保育を心がけて、手遊びをし、歌を歌い、お絵かきをし、日常の生活と何も変わらない生活を行ってくれました。

私は最後に出る時に保育所の入り口に「小学校にいます。」という張り紙をしました。それを見た保護者が急いで小学校に向かってくれました。保護者に子どもを引き渡していきましたが、18

時くらいで辺りは真っ暗闇になりました。一人の女の子がしーんと静まりかえった中、「ママは？」と訊きました。誰も答えられないわけです。生きているか、死んでいるか今どこにいるのかも実際分からないんです。信ずるより他はなかったです。子どもには「大丈夫、お水があるから、今一生懸命よいしょ、よいしょ来ているよ」、「後で来るよ。ただいま、って来るよ、おやすみ」って言いました。そしたら子ども達は「うん」と一言いって、全員職員の膝に抱かれて眠りについてくれました。

一歳の子ども達から小学校入学前の子ども達がなぜ誰一人泣かなかったのか不思議でした。あの時の子ども達の顔を私たち職員は一生忘れないです。本当に泣かなかったです。先生の顔をじーっと見て、ニコニコ笑顔で、私たちがかえって不安そうな顔をできないほどの笑顔を返してくれました。今何が起きているかが分からない、ただ大変なことが起きている、だけど先生は大丈夫と言っている、だから、今信じられる先生が言う言葉を信じるしかない、それが子ども達の現実だったのだと思います。

私たちは避難訓練というのを毎月やってきました。特に、津波避難訓練は年に一度、地域の方と一緒にやってきました。地域の方々のお手伝いが絶対必要だと思っていたからです。保育士の使命は命を守ることが第一です。避難の仕方を常に検証しておくということは大事だと思っておりました。幸い私たち全員が助かりましたが、奇跡ではありません。職員の努力の賜物だったと思っています。

自宅に戻れない保育士と子どもたちは避難所で1か月生活しました。避難所の中で3月27日に子どもを送り出す決意をいたしました。避難所の皆さんの協力を頂いて、保育証書を渡しました。

子ども達はとてもよく頑張っていました。生活を再建するために、形相を変えて走り回る大人のお蔭で、子ども達はおりこうさんでいなければならなかったんです。自分の心をどう表現していいか処理能力も未熟な子ども達ですから、「私ももっと違う風になりたい」「楽しくしたい」と言

えないんです。それが子ども達に影響して、不眠・夜響・夜尿という形に表れました。不安障害・学習障害・不登校・引きこもり・無気力・窃盗・暴力・虐め・トラウマ・PTSDという症状を出しました。将来に不安を抱えている大人たちの中で、子どもまで目が届かないのが現状でした。そして子どもの状況にお母さん達が不安を募らせていきました。学校とか幼稚園・保育所の先生たちも立て直しに走り続け、疲労困憊していました。本当に子ども達に生きる力を伝えられるか、生きる力は育つのかと不安をもったのがおよそ1年あまり経った頃でした。子どもの心のケアとともに、子どもの心に関わる支援者、保護者、先生達、地域のキーマンの方々などの継続的な支援、支援者の支援が欲しいと思った時期でもありました。

そして、今1,000日が過ぎて、子ども達はどうかということです。中学二年生の男の子ですが、半年ぐらい経った頃に「俺さ、助けてあげられなかったんだ。手を伸ばせばさ、手が届いたのかも知れないのに。俺生きていい？」と聞くのです。自分を責め続けていました。そんな責任を負う必要がない子達なのに、そんなところで心を傷つけられていました。最近小学校三年生の男の子が「ねぇ所長先生。死にたいって思ったことある？」「なんで？」と聞いたら、「俺さ、いないほうが良いと思うんだよ」と言うのです。親の足手まといになっているという思いがあったのかもしれませんが。子ども達が生きることが辛いと思う場面が多いのです。

本当に震災っていうのは、経験した人と経験しなかった人々の中に温度差があります。私たち名取市でも経験した人は全人口の中でも1割ですので、寄り添ってくれる人は数少ないんです。ですので、私は生活再建支援プロジェクト名取市のメンバーの一員として被災者支援にあたり、国の補助でサポートセンターも立ち上げました。「元気キッズ」という子ども向けのプロジェクトも月二回開催をしています。

閉上にあつたわかば幼稚園が全壊したので、新しい地域に新しい人を巻き込んで建設することを

考えました。なぜなら、福島から来られた方々がおり、集える場所が必要でした。それから、いわゆる社会的に弱者とされている方々と関わらせていただく機会が多くあります。社会福祉法人「ありのまま舎」評議員、名取市にある社会福祉法人「みのり会」、NPO法人「みやぎ発達障害サポートネット」の理事もさせて頂いています。

本当に改めて、人に支えられて、人と一緒にこれからも活動していきたいと思っています。子ども達の現状を伝えましたが、これからみなさんが社会に出た時に、周りを見渡して頂いて、是非手を必要な方々にも心を傾けて頂きたいと思います。拙い話ですけれども、私の話はこれで終わらせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

## (2) 高齢者分野

鈴木健太

石巻市の雄勝地域包括支援センターは、社会福祉法人の「旭壽会」という法人が石巻市から受託し、平成18年に開設しました。

雄勝地区人口が約4,300人、高齢化率約39%、の過疎の町です。震災被害は、死者・行方不明者が261名で人口の約6%でした。全壊世帯数と大規模半壊から半壊まで含めると1400世帯という家屋被害を受けて、雄勝の総世帯数1,637世帯の85%にあたる家屋が津波、または地震の被害を受けています。

震災当時、私は同法人内の特養の相談員をしておりましたので、その時のお話をします。特養の方は、長期入所が50床、ショートステイが10床の、計60床で町唯一の施設でした。併設のデイサービス・居宅介護、地域包括で、町の高齢者を支えてきた重要な機関でした。施設は高台にあったので津波の被害は免れましたが、地震によって甚大な被害を受けました。ライフラインも寸断され、道路が5日間は通れない状況でした。陸の孤島です。家を流されてしまった近隣住民も避難してきたので、入居者の方、デイサービスの利用者さん、それから職員・近隣住民等々、多い時に大体200名になりました。共同生活が続きました。

我々職員は交代で水を汲みに行ったり、限られた食材でごはん作ったり、自衛隊の方たちの支援をいただきながら、必死に一日一日を乗り越えていきました。ただ、町唯一の病院が被災し、医療体制が不十分でした。お年寄りはどうしても医療体制が必要で、薬とか流動食とかが枯渇し始めると、体力的にきついという状況になっていきました。余震も続きましたので、特養入居者については他県への避難の決断が下されました。隣の山形県の庄内地区のすべての特養が受け入れを表明してくれました。震災から一週間経過していたので、入居者の皆さんはかなり衰弱していました。先ほど佐竹さんも「奇跡などはなく」と言っていますが、私も職員の努力の賜物だったと思っています。

一方、在宅の高齢者の方は、避難に一区切りがつかしました。私は、5月に地域包括に異動となり、町全体を支援の対象とした動きになりました。震災による様々な影響を直接に感じるようになりました。まず福祉が切れ、医療も切れた状態でした。病院では医師・看護師の方が多く命を落とし、機能は停止状態で、全国から支援に入ったけれども、十分な状態とは言えませんでした。

道路が復旧せず移動の不便さが常にありました。これがライフラインの復旧の遅れにも繋がりました。行政の方も同じく混乱し、行政事務が滞りました。こういう状況の中で、社会的弱者である高齢者の方が震災後の日々をどう過ごしてきたのかということです。

事例は、家が流されずに在宅に住み続けた方、避難所に避難した方、仮設に入った方に分けました。

1番目に事例は、高齢の夫婦です。自宅は浸水しなかったのですが、このままでは生活できないという方です。健康面で、肩腰の痛みと眩暈がありました。かかりつけ医の確保は震災直後の大きな問題でした。ドラム缶のお風呂、山水を汲みに行ったとか、そういう困りごとでも話されていました。特に高齢者にとっては、水汲みがとても大変だったようです。近隣の方が多く転出してしまったことで、話し相手が減ってしまったとも話して

いました。これを失ってしまうというのが本当に何よりも避けなければいけなかった事態のように思います。精神面では余震の恐怖が多くの方から聞かれました。

2番目の事例は避難所で聞きました。震災から3か月間半くらい経った時点で、体育館型の避難所にいる方でした。85歳と82歳のご夫婦です。津波で自宅は流されて、避難状態におり、仮設への入居待機中でした。健康面と生活面の困りごとを持っていました。便所が和式では大変だと言っていました。この方たちは布団で寝ていますが、ベッドではないために立ち上がりが大変だったと話されていました。周りとの関係では、ちょうどこの頃に仮設ができて、徐々に仮設に入っていくという段階でした。避難所で一緒だった方たちが引っ越して寂しいということでした。栄養面は、避難所には最低限のものしか置いていませんでしたので、ちょっと心配されるところはありました。

3番目の事例は仮設住宅に入った後のお話です。4か月くらい経過しています。仮設住宅に入った81歳と80歳のご夫婦です。7月8日に仮設住宅に入りました。この方からの訴えは周りとの関わりです。仮設は大体同じ地区の方が入るので周りとの交流はあったのですが、部屋が狭いのでなかなか皆でお茶をすることが出来ないということでした。仮設住宅開設後1か月くらいは機能していなかったのです。精神面では、81歳のおじいさんは現役の漁師でしたから、仮設にいて1日テレビを見ている生活は苦痛だったようです。住環境では、仮設に隙間から虫が入ってくるという不満は聞かれました。浴室はユニットバスなのですが、高齢者の方にとっては跨ぐのが辛いという不満は出ていました。仮設に入ってから経済的な自立が求められたが、先々のことを考えて経済面の不安はあったようです。

4番目の事例ですが、これは69歳の男性の一人暮らしの方です。震災でご家族を失って一人暮らしになった方で、家事で困っていました。娘さんに教わる等して徐々に慣れてきたと言っていまし

た。この方は比較的前向きだったのですが、閉じこもり、アルコールという問題がありました。この方は消防団の方で、津波の際本当に目の前にいた人を助けたことで奥さんを助けることができなかつたことをずっと悔いていて、震災後眠剤を飲まないとい眠れない状況になって、それが今でも続いています。

以上が、震災直後の高齢者の状況の一端です。私も今まで自分の未熟さと闘いながら走り続けてきたのですが、本当にいろいろなことを見てきました。見ることの多くは辛い現実だったのですが、時には明るい光が差し込むこともありまして、なにもなくなってしまうからこそ、出来ることがあるんじゃないかなと感じることができています。雄勝は本当に今、福祉と医療と保健分野が一体となって、地域単位で高齢者とか障害者の方とか、子どもを支援する体制となっています。この体制を作る上で、特に大きかったのが雄勝の病院が被災した後にできた診療所に赴任された先生の存在です。横の連携を作るためのミーティングもこの先生が声をかけてくれて開催しましたし、診療所の待合室も、お茶のみの場として開放しました。コミュニケーション形成の場として確立して下さいました。

このように地域の再生が進む中で、私は支援者の方ではなく住民の方々が持つ力の素晴らしさを何度も見てきました。仮設という環境の中で最も危惧されたのがコミュニティの再構築の困難さでした。地域包括としても、集会所で介護予防教室を開催するなどの対応をしましたし、石巻市は社協に委託して仮設の見守り隊という訪問支援員も配置しました。行政の保健師さんも個別訪問しました。しかし、住民を支える主役はやっぱり住民でした。仮設の中には必ず世話役の方が登場しました。その方を中心に住民達の力でコミュニティを形成していく様子を私は何度も見てきました。例えば、仮設の中にいる認知症の高齢者への対応も非常に的確でした。ただし、そういうような様子を見るのは比較的小さな仮設住宅でした。ところが石巻は、何百世帯、何千世帯もあるようなマ

ンモス仮設を作ったので、そういうところが未だにコミュニティの構築がままならないところがあります。しかし、我々は、住民の方々が立派な社会資源に成り得るということを身をもって感じてきました。我々は住民が力を発揮できるような土壌を作り上げていくことを意識していければよいと思っています。

拙い話ではありましたが、記憶として持ち帰って頂けるのであれば、それだけで今日ここに来た甲斐があったのかなと思います。どうもご清聴感謝します。ありがとうございました。

### (3)障害者分野

村上 仁

改めまして皆さんこんにちは。宮城・仙台障害者相談支援従事者協会の村上と申します。この協会は、被災後に県内の障害者相談支援に関わる方々のスキルアップのために結成された団体です。私自身、本業といたしましては、石巻市女川町の障害者相談事業所「ひまわり」というところに所属しています。今回震災で改めて感じたところは、手帳の有・無に関わらず日常生活に何らかの支援が必要な方というのが震災後に大きく見えたというところです。

3月11日、私は休みでしたが、15時半前には市役所に入って、障害福祉担当者と一緒にまず障害者をリストアップをしました。特に、医療的ケアが必要な方々のリストアップをして、必要な支援について打ち合わせをしました。そして、16時半すぎに、石巻市役所周辺にも水が上がってきました。特別支援学校では卒業式の日で、まだ学校に生徒が多くいた時間です。デイサービスを受けている方は、まだ送迎時間前ですので、通所施設にいました。そういった方々についてはもはやそこで被災が始まったわけです。数か所の障害者福祉施設が被災しました。訪問先に行って支援したヘルパーさん、そのまま自宅での支援を続けたヘルパーさんもいます。利用者を連れて避難場所に逃げた方もいます。通所施設自体が避難所化しているの、職員は利用者たちをどのようにご家族

に引き渡すかということで動きました。障害者の被災状況・被災の割合についてです。全体の死者数からすると割合としては多かったわけです。訪問してやはり亡くなられている方を目の当たりにして、そういった手続きをとらざるを得なかった相談員もいました。身体障害・聴覚障害を含めてなかなか自分から動くことのできなかった方や、津波の情報が入らなかった方、精神疾患のため自分の家から離れることを拒んだ方、津波が来るのが分かっているにもかかわらず津波を想像せず自宅から離れなかった方などが多々いました。間違いなく災害弱者です。あの時を経験した支援者の何人かは「あそこに助けに行ければ」と後悔の気持ちもっています。ただ、あの地震の中、あの障害者のところまで行く力はなかったです。自分が逃げるのが精一杯で、なんとか逃げていたという記憶があります。過疎地・僻地では地域の人が助けてくれたようです。逃げるついでに声をかけ、引っ張って行ってくれたから助かった、というお話も聞きました。私たちは、沿岸部を中心に記憶がある限りリストアップをして、手分けをして動き始めました。行政職員も本当に情報が届いていない状況でした。障害をお持ちの方とその親の方の生き別れというのが数件ありました。

4月頃から、情報が集まってきました。私は、地元の障害者支援として現地コーディネーターをしました。ところが、「福祉避難所」の多くが「高齢者のための福祉避難所」であり、「障害向けの福祉避難所」は市も想定していなかったのです。社会福祉法人石巻祥心会が「福祉避難所」を開所したという情報が入ってきて、何人かの障害者をお願いしました。その時、障害者が、「自分たちはこの地区に残りたいです」「日常生活に支障があってもやっぱり残りたいんだ」と言っていたのが鮮明に残っています。障害のある方々に、なぜ避難所から福祉仮設に行つて欲しいと思ったかという、地域に障害者を受け入れない環境、バリアーみたいなものがあつたからです。地域も必至だったのです。結局、日ごろからその本人が地域と関係をもっていたかということです。一方で、

「ぜひ、ここの避難所にずっといてもらって構わないです。みんなで手伝いますので」という話もありました。

避難所では、いろいろな障害がある中で、身体障害の方についてはトイレの使いにくさ、寝る場所の確保の難しさ、というのが挙げられました。精神障害の方については、服薬の問題、その人が飲んでいた薬の確認ができずなかなかお薬をもらうのが難しかったのです。1週間以内の話なのですけども、薬が飲めないで夜も眠れないということもありました。瓦礫の中を毎晩歩き回っていたという方がいました。地域の目の中で疎外されてしまった障害者もいました。知的障害者の中には福祉的作業所の利用をされる方も多いため、そうすると地域との関わりがまるつきりなくなってしまう。そういった方については、地域の理解も正直難しかったです。広域合併した石巻市の中で障害者に対する支援になぜ違いが出たかということ、地域の関係性があるかないかです。あつたところは本当に避難所でも強い連携がとれていたし、関係がない地域では障害者は本当に疎外されていました。高齢者もちろんそうです。その避難所運営に支障が出る方たちは、皆さん疎外をされたと思います。地域のコミュニティが出来ていたところでは、「周りの、〇〇おばあちゃんだから」と手伝ってくれていました。ただ、関係がないところは本当に、「あの人喚いていて」とか「おむつも替えられなくて臭い人だ」で終わっていました。避難所生活が長くなるにつれて、被災者全体に心やアルコールの問題、金銭的な問題が起きていきました。義援金が入ってきた中で、その使い方に「あの人おかしい」、「この人ここにいるべきではない」というような苦情の話が出てきました。その苦情について私たちは日常生活の支障として助言までは出来ますが、それ以上は出来なかったという悔しさが残っています。あとは震災関係の手続きです。役所の出先機関には本当に大勢の人達が集まっていました。1日待っていても手続きができないような状況です。それを障害者や高齢者ができるか、そんな訳ありません。あとは財

産管理・権利擁護ですけど、自分を証明するものがないわけです。銀行によっては「障害者手帳を身分証明書として認めません」というところがあったのです。両親が亡くなってしまって手続きをするのに本人の通帳がないと義援金の手続きもすべてできない、ご本人さんの生活費を賄うためのお金を得ることもできないという状況も起きました。急なお金に関しては社協の貸し付けを利用しようとしたとき、成年後見制度を利用せざるを得なかったのですが、本当にバタバタした中でいろんな機関が無理をして受けていただきました。

「将来への生活への不安」についてです。仮設住宅が出来上がっていくにつれて、バリアフリー住宅といいながら電動車椅子が玄関から入らないのです。そのため結局、地域を離れざるを得なかった障害者もいたのがこの時期でした。

「これからの地域の課題」についてです。今、「復興公営住宅」という次の住まいの準備が各市町村で始まっています。「自分がどこに住んだら良いのか、震災前に住んでいた地域に戻るべきか、戻らないべきか。」と悩まれている方もいます。特に障害者の親御さんが悩んでいます。今までは自分たちが無理をすればなんとか病院へ連れて行くことができたけれども、復興した街の中でそれができるかというところで本当に悩まれています。

この震災というのが、震災というだけではないのです。地域の格差、障害があっても働ける場所があるか、住む場所をどうするかと考えた時に、「無理してここに居る必要はない」と考えてしまうのは当然の結果だと思います。それを考えた時に、この震災というのは、よく言われる「少子高齢社会」が10年早くこの震災の年に来ただけだと私は感じております。「新しい形での地域づくり」というのが本当に今必要になってきていて、これから、復興公営住宅のタイミングに合わせて大きな仕組みづくりを改めてしていく必要があると考えています。これは障害者だけに特化した話ではなくて、障害者も、高齢者も、子どもでも、さまざまな支援体制が組める地域づくりの在り方、というところで私たち専門職がこれから頑張っ

ていかなければならないと思っています。

私の話はこれで一応終わらせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

#### (4) シンポジストへの質問・感想と返答

市川一宏

それではここからは、市川が進めます。シンポジストと基調講演をいただいた森先生に質問と感想が来ていますので、お答えいただきます。まず、佐竹さんからお願いします。

##### ① 佐竹悦子

私への質問は、「子どもの言動に不安を覚えました。私よりずっと重い体験を小さな体でしてきた子どもにどう対応すればいいだろう、何ができるのかと思いました。」というものです。子どもは、今非常に戸惑っています。しかし、再生能力を非常に大きく持っています。これから良い体験をたくさんできるように周りの大人が注意してあげられたらいいのだらうと思います。私は、将来、震災がすべて悪い事の原因として生活してほしくないと思っています。震災があったから人との絆に気付き、強く生きていけると思っています。

##### ② 鈴木健太

私への質問は「今後どのような形で地域の繋がりを強めていきたいと思っているか知りたいです。」というものです。ご近所付き合いが基本中の基本で、こういう災害があった時も近所の助け合いで乗り越えてきたというのが田舎にはあります。これから新しい環境で復興支援住宅での生活が始まる中で、地域の繋がりといいものを作っていくために、我々支援者は本当にちょっとヒントを与えると、手を差し伸べるぐらいでいいのかなというように思っています。住民の方はすごく潜在能力があるので、そこに期待していきたいなと思っています。

##### ③ 村上 仁

私への質問は「仮設へのコミュニティ支援はどのようなことをしたのか。」というものです。女の人は強いです。どこへ行ってもやっています。

逆に弱いのは仕事が終わった男性です。やっと一つ成功したのは、親父の飲み会の機会を作ったところがありました。コミュニティづくりのきっかけになったかなと思っています。

#### ④森 正義

私にも質問が来ました。「災害が起きた時に低体温対策をどうするんですか、高齢者も障害者も。」というものです。その場にあるもので考えるしかないの、想像力というか決断力が必要です。それからその場にいる皆さんで協力することだと思います。

それでは、市川の方から、次の2つの質問をいたします。皆さんに答えていただきます。1つは、「その方を傷つけずに元気づけるにはどのような声掛けをしたらよいのか」、2つには「今私たちにできることはなんですか。」ということです。村上さんからお願いします。

#### ①村上 仁

1つ目については、前年度の石巻のデータによると、自殺がこの10月現在で前年度の年間を超えています。亡くなっているのは仕事も家庭もある男性だそうです。40代以上の男性が多いです。分析してみると、そういう人は震災から走りっぱなしなのです。走ってきた中で、職員・専門職のメンタルヘルスが今後ますます必要となってくるのではないかなと思います。私はこういった関係の中でいろんな方と出会えることが心の健康を保つことになると思います。2つ目については、それぞれの体験を言葉で、文章で、色んな形で伝えていく作業がまだ済んでいないと思います。それをぜひこれから皆さんより若い世代が伝えていってほしいと思っています。

#### ②鈴木健太

1つ目については、傾聴が一番大事なのかなと思います。1年近く経った今でも当時の事をお話しするという方も多いですし、意外と被災した方も伝えていかなければならないという使命感を持っていますので、無理に忘れてもらうとか気を

紛らわせるような支援の方法は必要ないと思います。2つ目については、私たちにできる事はやっぱりこれも月並みですけど、とりあえず忘れないでいてもらうことかなあとと思います。

#### ③佐竹悦子

今回分かったことは、相手を思いやって心から発信する言葉は、例え厳しい言葉でも相手を傷つけないということです。

はい、ありがとうございます。私がいつも学生たちに言うのは、「専門職である前に一人の人間でしょ、人間としての素養が求められるよ」ということです。悲しい時に傍にいて差し上げるのは当たり前だし、そういう様なことを前提として専門性は成り立つのだということです。そうでなかったら専門性で全部を分断してしまうことになると言っています。

最後に4名の方にお聞きしたいんですけど、「震災発生時から3年経とうとしている現在までの中で一番不安を感じることは何ですか」という質問があります。森先生からどうぞ。(市川)

#### ①森 正義

疲労感が通常のものとは全然違います。今後心身に支障をきたす人が増えていくのではないかと不安です。

3年は通過点にしかすぎません。0と100の間に1から99のやり方があるはずだってそれをみんなが忘れないことだと思います。(市川)

#### ②佐竹悦子

不安を分らないことが不安です。というのはずっと震災当日から現在まで走り続けてきていて止まってないので、いつ止まるのかっていうのが個人的には不安です。全体的には忘れられることが怖いんです。

#### ③鈴木健太

不安はとにかくマンパワーの不足です。田舎での仕事は楽しいですから、田舎で働いてみません

か。

#### ④村上 仁

今たくさんの団体が支援に入ってくれているが、これを地域にどこまで残せるんだろうというのが一番の不安です。

#### 4. 総括

市川一宏

「被災者だから」という言い方は「高齢者だから」とか「障害者だから」という、言うてはいけない言葉に類似します。

大きな課題は被災地の広さ、被害の大きさにあります。情報も支援活動も物資も混乱しました。障害を持つ方の避難の難しさが顕在化しました。民生委員は一人の不幸も見逃さない運動の中で逃げ遅れて亡くなりました。私は学生に「まず地震が来たら自分の命を守りなさい、私も大丈夫だったらあなたたちを助ける、ダメだった場合助けられないから、まず自分の命を守る、それからあと残された命で助け合っていけばいい」と教えます。民生委員は「どうして守らなかったのか」と言われるのです。それで民生委員の方はものすごく傷つきました。でも震災当時の活動で何人もの方が亡くなっているのですよ。まず自分の命を守ることが大事です。

色んなところで災害が起きようになり、大震災は東北だけの議論ではなくなりました。今日的支援の必要性が炙り出された問題だということです。過疎の問題や高齢化の問題や単身者の問題が大震災を通して炙り出されたのです。では、これらの問題にどのように支援していくのかを考えてみます。

自立支援とはサービスを受けないで自立するというものはないのです。援助を受けながらできることはする、これが自立支援の大きな考え方です。大震災を通して、この議論をやっつかなくてはなりません。また、地域を離れざるを得ない人々の生活上の課題や見做し仮設の問題もあります。これらは仙台を含めて、被災地全体の大きな課題です。児童の心の問題、助けられなかった痛みは

子どもの心に残っています。将来が見えないというところで起きている児童虐待、中折れ現象、就労困難、要介護要支援高齢者の増加、男性の閉じこもり、アルコール中毒などにどのように支援していくか、これらも今後の大きな課題になっていくと思います。

その意味で、継続的な心のケア、絆がとても大事なことだと思います。また、専門職に代打の支援が大事です。それは文化の違う地域から来た専門職が支援の最前線に臨むのではなく、専門職がやる気になるバックアップをもって助けることです。一緒に歩むこと、燃え尽きないように支援することが大事です。被災地の復興は日本の未来であると思います。日本の地域はどうなっているかを考えてみてください。大変なことになっているのです。自殺者は増え、東日本大震災で亡くなった方を超えているのです。そして、孤立の問題、引きこもりの問題です。本当は大変な課題になっているのです。

仮設住宅という言葉がたくさん使われますが、仮の人生や仮の生活なんかないのです。「被災者なのだから仮の生活で止むを得ない」という考え方はおかしいです。真剣に被災者の生活を考える必要があります。寄り添うケアが大事で、靴に足を合わせるのではなく足に靴を合わせてほしいのです。そして、互いに理解し合いながら0か100ではない1~99の活動を進めていくことが必要だと思います。被災地支援を共同していくことが必要だと思うわけであります。ご清聴ありがとうございました。

#### あとがき

支援に携わった専門職は、災害弱者に対する特別な支援体制がない中で奮闘していた。また、災害弱者と言われる方々は、被災者という枠の中にはあるものの、震災当初に特別な支援をほとんど受けることができていなかった。この状況を踏まえて、登場した支援者の報告に共通していたことは、普段の地域社会とのつながりと、「ここにいろよ」という存在を伝える重要さであった。逆に

考えれば、今回の震災を通して、日ごろの弱者と社会の関係が炙り出された面があるということになる。この大震災は、私たちに社会的弱者と社会の関係を作り直す必要性を突き付けているのではないだろうか。

最後に、本公開研究会の開催にあつて、協力いただいた皆様に心から感謝申し上げたい。

(熊坂)

